

五線譜のラブレター (DE-LOVELY)

2004(平成16)年9月30日鑑賞(東宝試写室)

★★★★



監督＝アーウィン・ウィンクラー／出演＝ケビン・クライン／アシュレイ・ジャッド／ジョナサン・プライス (20世紀フォックス映画配給／2004年アメリカ・イギリス合作映画／126分)

……1920年代から40年間にわたって次々とヒット曲を生み出し、『夜も昼も』『ビギン・ザ・ビギン』など多くのスタンダードナンバーを定着させた伝説の作曲家コール・ポーター。この映画は彼と、彼の音楽を生み出す原動力となった最愛の妻リンダとの人生をミュージカル仕立てで描いた感動作。音楽好きのあなたなら、数々の名曲に酔いしれながら至福の時間を過ごすことができること確実……。

コール・ポーターとは？

『夜も昼も』や『ビギン・ザ・ビギン』等のスタンダードの名曲は私もよく知っているが、これら1920年代から1960年代の名曲の数々を作詞作曲したのが、コール・ポーターという天才音楽家だということを私は知らなかった。1920年代のパリにおける、運命の女性リンダ (アシュレイ・ジャッド) との出会いの後、1964年に死亡するまでのコール・ポーターの人生を演ずるのは、アカデミー賞俳優のケビン・クライン。『海辺の家』(01年)、『卒業の朝』(02年)での名演技は記憶に新しいが、このミュージカル仕立ての映画では、自らピアノを弾き、歌を歌うとともに、若き日から晩年までのコール・ポーターの像を見事に演じている。

妻リンダ役はアシュレイ・ジャッド

1920年代のパリの社交界で、「パリで最も美しい離婚女性」とうたわれたリンダは、コール・ポーターと運命的な出会いを果たした後、たちまち結婚にゴール

イン。もっとも、人生いいことばかりではない。コール・ポーターの同性愛、大成功に伴う享樂的な生活の連続の中、リンダはいったんはコール・ポーターと別れ、1人パリへ戻っていった。しかし1937年、コール・ポーターが思いもかけない落馬事故によって、両足切断か、という大怪我に見舞われたことによって、再びリンダはコール・ポーターにとってかけがえのない女性となった。そんなリンダは、コール・ポーターに先立つ1954年、肺気腫によって死亡。

この美貌で、献身的な、女性リンダを演ずるのは、『評決のとき』（96年）、『ダブル・ジョパディー』（99年）等に出演した、私の大好きな目の大きな女優のアシュレイ・ジャッド。1920年代から30年代にかけての、最も華やかだったパリやハリウッドでの上流社交界の美しい人妻から、コール・ポーターとの苦悩の日々、そしてコール・ポーターとの心を通じ合った中での「お別れ」など、その演技は今までのアシュレイ・ジャッドが演じた役柄とは大きく雰囲気異なるもの。それにしても、アシュレイ・ジャッドが有名な音楽一家の出身であることをはじめて知ったが、この映画での堂々とした歌いぶりは見事なもの。

何とも魅惑的な日本語タイトル

この映画はアメリカ・イギリス合作映画で、タイトルは『DE-LOVELY』だが、その日本語タイトルは『五線譜のラブレター』。誰が名づけたか知らないが、これは何とも魅惑的なネーミング。コール・ポーターの音楽家としての人生、そして彼とリンダとの生涯の愛を、ミュージカル仕立てで描いたこの映画に、ホントにピッタリのタイトルだと感心……。

コール・ポーターとモーツァルト、天才には共通点が！

コール・ポーターは、ミュージカルと映画を中心に、生涯870曲という大量の楽曲をつくったとのこと。時代とジャンルは違うものの、この大量製作にかけては、あの神童モーツァルトと相通じるものがある。また、若い時のコール・ポーターはいかにも奔放で、才能だけで次々と音楽をつくり出していたが、落馬事故を含む数々の試練を受けたコール・ポーターや、晩年のコール・ポーターは、才能だけでは思うような音楽をつくり出すことができず、必死に音楽と向かい合い、

闘っていることが、映画の中でピアノと五線譜に向かっているコール・ポーターの姿勢ににじみ出ている。そして、これはモーツァルトも同じ。1984年の第57回アカデミー賞で作品賞をはじめ、主演男優賞、監督賞等の8部門を獲得したあの名作『アマデウス』(84年)に描かれたモーツァルトも、若い時はその才能をもてあまし、浪費するだけの鼻持ちならない(?)作曲家だったが、晩年(といっても30歳代だが)のモーツァルトは、お金に困窮し、スポンサーにも苦しむ中での、生命をけずりながらの懸命の作曲活動だった。

才能に恵まれるということは、ある面で幸せなことだが、他方で厳しい運命と向かい合わなければならなくなるという意味で、大変なものだとこの映画を観て実感! つくづく、自分が平凡な人間でよかったと、再認識!

これは、映画それともミュージカル映画?

この「作品」は、映画か、それともミュージカル映画かよくわからない合体(?)作品。ミュージカル映画でも、映画である以上、場合によっては歌の吹き替えはあるものの、登場人物(役者)ははっきりしている。

しかし、この「作品」ではナタリー・コールやロビー・ウィリアムスをはじめ、現職の歌手合計13名が次々と登場するし、ホンモノの映画のラストシーンが流れるから、わけがわからない……? 他方、主役のコール・ポーターを演ずるケビン・クラインは、全編を通じて、自らピアノを弾き、自ら歌っているが、これは楽曲の製作過程をリアルに表現するためのもの。そして、それはそれとしてリアリティがあるものの、突然スクリーンがその製作過程から本物の映画やミュージカルの舞台に変わると、ちょっと違和感も……?

そんな難しい合体作品(?)のこの作品をうまく切り盛りしている、いわば「狂言回し」の役がゲイブ(ジョナサン・プライス)。彼は死期の迫ったコール・ポーターを人生のショーへと誘う演出家としての役柄を実に巧みに演じている。そのうえこのゲイブは、この作品のフィナーレでは、コール・ポーターのヒットナンバーを自ら歌いあげるというマルチな才能ぶりも披露。何とも不思議な感覚の映画(?)だが、私はこんな楽しいミュージカル風映画(?)大好き!

2004(平成16)年9月30日記